

(医学双書)
放射線医学＝臨床編 改訂第7版

足立 忠 東京医科歯科大学名誉教授
鶴見大学教授

浜松医科大学副学長
高橋 信次

この本はその初版より初心者を対象とし、詳細は専門書にゆずるというたてまえで書かれている。その点で著者の意図は美事に生かされており、本邦ではもっともすぐれた本であると私は思う。この著書は30年間にわたって現在は改訂7版を重ねている。こんなに普及した放射線医学の本は、日本では未だ曾つてない。それだけ歓迎されているのである。

この本はX線診断、放射線の生物学的作用、放射線療法の3編に分けてあるがそのもっとも大きな特徴は各編とも簡単明瞭で、しかもいべきことはおちなく述べているということである。例えば消化管のX線診断をやる人は消化管X線診断学を読んでもらうことにしてこの本ではそこに往々にして欠落しているX線診断とは何か、X線の生物学的作用をどう評価するかについては充分述べている。日本の現状からいっても、ICRPの精神から考えてこの叙述の仕方は極めて適切である。

他の本に書いてない著者創案も多くある。例えば線コントラストと写真コントラストというようにコントラストを分けていっているが、それについては、私はこの本の初版の当時から感心していて、これを私の本にもとり入れたくらいである。

学生にとってもっとも重要なことは、X線の診断と放射線の治療であろう。それで画像の成立、治療の方式にこの本は最も力を割いている。

また最近の新しい知識を取り入れ

ている。コンピュータトモグラフィがこの2、3年急速に普及しているが、これが十分説明されている。また重粒子による撮影というようにことにも紙面を割いている。治療の方面では、中性子、陽子、パイ中間子のことにふれている。

現在、放射線医学というものがどういう状態にあり、しかもどうい

方向に進んでいるかはこの本を1冊読めばわかると思える位である。

その本の内容は目次を一瞥すればどのような思想で、どのような深さで書いているかということが会得されるのであるが、この本はその意味できわめて多様性のある内容を示しているといえよう。またその本がどれだけの親切心で書かれたかというのは、これは索引があるかどうかで推察されるものだが、索引だけで9頁もある。この索引を使うと字引代りになるくらいである。

この本がたいへんよく推賞するに足ると私は思う。

A5 頁350 図128 写真61 1977
¥3,200 千200 <医学書院刊>

胃と腸の臨床病理ノート

佐野 量造 元国立がんセンター病理部

新潟大学教授
武藤 輝一

この度佐野量造先生が生前に書き残されあるいは口述された資料を基として渡辺 漸氏ほか佐野先生の友人や教えをうけた方々により「胃と腸の臨床病理ノート」が出版された。すでに佐野先生御自身により出版された「胃疾患の臨床病理」は周知のところであるが、本書においては胃腸管ポリポージス、大腸腺腫、大腸癌の項が加えられている。

本書は疾患の1つ1つについて切除標本を中心に解説が加えられており、さらに必要最少限の内視鏡所見も加えられてあって私共外科医にとって大変参考になる。しかも折に触れてふり返ってみたいと思う各疾患についての考え方、発生、進展、自然史、統計的事項など、臨床医の心を見ぬくごとく必要な事柄が書き加

えられている。心憎いばかりの配慮である。外科医は1例1例の手術をするたびに、この本の中の該当する部を読むことによってその疾患に関する知識が深まり、整理されてくる。

まずは第一線において活躍される内科医、外科医の方々にお奨めしたい本であるが、若い外科医の人達からは大変身近に感じられる本であるという意見を聞いた。若い研修医の人達にも臨床講義を受ける医学生にも理解されやすいよう平易に書かれている。佐野先生の口述をできるだけ変えぬように配慮された編集者の方々の努力は、この辺にも生きていくようである。

元来、講演集などには文献の付記されることは少ないが、必要に応じて参考となる文献が書き添えてあ

り、それぞれの疾患を溯って調べてみようとすることも容易である。

本書を読みながら、胃癌研究会でおみうけした佐野先生特有のポーズが目にかんできた。この本にもうかがわれるような数多くの業績を残された故佐野先生の御冥福を祈るとともに、この本の発刊に努力された編集の諸先生に敬意を表する次第である。たった一言、平素残胃癌に関する佐野先生の分類を使用させてい

ただいている外科医の1人として、この辺のことも記載されていたらと思った次第である。

経験深い臨床医の方々にも、若い研修医の方々にも、手許において自らの経験症例と対比しつつ読まれることをお奨めしたい本である。

B 5 頁306 図114 写真293 原色図
42 色図1 1977 ¥14,000 ㊦300
<医学書院刊>

PO 内科診断マニュアル

編集 H. H. Friedman, S. Papper

監訳 日野原重明 聖路加国際病院・臨床医学教育顧問

大阪医科大学教授
鷹 津 正

日常の臨床において診断を下す場合にいかなる思考過程で行なわれているかに関して、今年の内科学会の会頭演説で木村栄一教授が詳しく論説されている。すなわち従来の診断学の教科書における診断形式として、(a)枝分化論理による診断、(b)マトリックス型診断、(c)消去的診断があげられ、同教授は数理的診断法をこれに加え、その理論的根拠について論じ、Computer による本法の実用化に言及している。しかし、そのprogram を組む場合、いかなる因子を取りあげるかの判断は医師である。病歴を綿密に取り、理学的所見を正確に観察し、ついでその延長としての検査、さらに化学的諸検査を行なって、それらのうちのなにが当該患者のその時点における問題点かを判断する必要がある。その際因子は1つでない場合が多く、その間の関連性を考えなければならず、またいずれに重きをおくべきかも医師の判断によらなければならない。

内科学教科書においては、Harri-son のごとくまず症候をとりあげ、

その成因、鑑別診断に重点をおき、後に疾患自体を記述するものもあるが、多くは後者を重視する。また、内科診断学教科書は Klemperer 以来病歴のとりかた、症状、理学的所見、諸検査法、鑑別診断などあまりにも雑多な記述がなされ、日常の臨床にはさほど有用とは考えられない。

コロラド大学の teaching staff が中心となって、医学生および卒後研修の医師のために書かれたコロラド大学の H. H. Friedman 教授の Problem Oriented Medical Diagnosis (PO 内科診断マニュアル、日野原重明博士監訳)は、実際の診察時に、症状、理学的所見、あるいは諸検査のうちもっとも問題となるものをまずとりあげ、これらをひき起こす条件を考慮し、いかなる検査を進めるべきかの順序で論述している。内科疾患は内科に限定されるものではなく、あらゆる疾患を包含し、心血管、呼吸、消化、血液など各系における執筆者が異なるため、あるものは症状、あるものは理学的所見あるいは検査成績と、問題のとり上げ方の重

視点が異なるきらいはある。これは止むを得ないことで、実際の個々の症例において、症状、異常所見は単独に現われることはなく、複數因子によって問題が提起されるのが通常である。

本書にとりあげられた一般の問題のうち原因不明熱は内科医にとってしばしば遭遇する難問題で、診断の思考過程などはきわめて有用と考えられる。心血管の問題では、胸痛を、反復する胸痛、長引く胸痛に分つて思考が進められ、動脈性高血圧に関してはきわめて論理的、かつ实际的に詳細な記述に多くの紙数がさかれている。呼吸の問題では、呼吸困難、消化の問題では下痢、血液の問題では出血および凝固異常、腎では電解質の障害、筋骨格下では筋肉痛、腰痛、内分泌液では成熟障害、神経では失神、てんかん、めまいなど、日常臨床にきわめて重要な症候がとりあげられ、解説が行なわれている。

臨床においては個々の症例がもっともよい教材であり、多彩な問題を投げかけ、それを解決して最後の診断に到達するが、既知の病名をラベルすることにより事終れりとせず、常に個体を全体的に経過を追って観察しなければならない。

本書の監訳者日野原博士は周知のごとく長年月臨床の第一線で活躍されるとともに、内科専門医制度の推進に多大の貢献をされた医学教育者であり、それぞれ専門のよき執筆者を得て本書が上梓された。本書が若い医学生にとって日常臨床のよき伴侶となることを固く信じて、推薦の詞とする。

A 5 頁432 1977 ¥4,200 ㊦200
<医学書院刊>